

# 『元朝秘史』におけるコアクチン老婆

～ブルカン山へのテムジンの逃走において果たした

ウリヤンカイ一家の役割～

## The Woman named “Old Qo’aqčın” in the *Secret History of the Mongols*: An Uriyanqai Family’s Role Played in Temüjın’s Escape to Mount Burqan Qaldun

藤井 真湖

Mako Fujii

### Abstract

"Old Qo’aqčın" whom I am trying to discuss in this paper first appears in § 98 of the second volume of the *Secret History of the Mongols* (hereafter the SHM). Her appearance is very abrupt and the SHM has not mentioned at all why she came to serve Mrs. Hö’elün. But when the Merkits raided the Temüjın’s family, it was her who first noticed the horse's hoof sound and informed her master, Mother Hö’elün.

This scene was the beginning of the so-called Mrs. Börte’s case - where Mrs. Böröte, the legitimate wife of Temüjın, was abducted by the Merkits. Behind the incident is the fact that Yisügei, father of Temüjın, looted Lady Hö’elün from the Merkits, but because Yisügei had already died, there was a circumstance that they tried to take revenge on Temüjın instead of Yisügei. However, taking the lesson from the incident that the Tayiči’ d abducted Temüjın, which occurred before this case, Temüjın escaped to Mount Burqan Qaldun. In the absence of Temüjın "Old Qo’aqčın" struggled to save Mrs. Börte left behind in the camp site.

Old Qo’aqčın is a key person in that she gave her master a first warning of the raid and tried to protect Mrs. Börte. Even if it turns out that she misunderstood the Merkits as the Tayiči’ds, Temüjın is grateful to her. The gratitude to her is stated at the beginning of the word of gratitude to Mount Burqan Qaldun. However, thanks to Mount Burkan Qaldun is directed towards the mountain itself, and people other than her are not mentioned there. Therefore it seems that there is an important meaning to mention her.

By the way, Old Jarči’udai from the Uriyanqai group comes down from Mount Burqan Qaldun with his son Jelme and joins Temü jın. This event is drawn in § 97, and this is the section immediately

before the section where Qo'aqčın first appears. In this paper, I would like to present a hypothesis that Old Qo'aqčın was the wife of Old Jarči'udai. And by adopting this hypothesis, it becomes possible to understand logically the meaning of their behavior in § 97 to § 110 of the SHM.

### はじめに—問題の所在—

『元朝秘史』(以下、秘史)においてメルキト集団に妻ボルテを奪われたいわゆるボルテ夫人事件のさいに、テムジン(チンギス・カンの幼少名)はブルカン・カルドゥン山に逃げ込み命拾いしたというエピソードが記されている(巻3 § 100、§ 102、§ 103)。そのエピソードにはテムジンによるブルカン・カルドゥン山への感謝の念が綴られている(巻2の§ 103)。興味深いことに、ブルカン・カルドゥン山への感謝の言葉の冒頭にはテムジンの母ホエルンの家の使用人であるコアクチン老婆に対する感謝が述べられている。巻2 § 103 でテムジンの語る言葉の冒頭部分を引用すると次のようになる。ただし行頭も固有名詞以外は小文字で記してある。以下も同様の扱いとする。

Qo'aqčın_eke-yi	コアクチン母が、
solongqa bol=ju sonos-qu-yin tula	イタチになりて聴くゆえに、
ünen bol=ju üje=gü-yin tula	銀鼠になりて見るゆえに、
büdüin beye-en buru'ud=u=n	身一つで逃れ
bugiya moritu	前脚をしばった馬で
buqu-yin horum horumla=ju	鹿の通り路を歩き、
burqasun ger gerle=n	樹の枝でつくった家を家となし
Burqan de'ere qar=u=la'a.	ブルカン(山)上にのぼった。
Burqan_Qaldun-a	ブルカン・カルドゥン(山)に
bö'esün-ü tedüi amin-iyān bulji'ulda=ba bi.	虱ほどの己が命を隠してもらったぞ、私は。

以上に引用したように、テムジンの当該山への感謝の言葉は、ブルカン・カルドゥン山に向けられる前にコアクチン老婆に向けられている。なぜこうしたブルカン・カルドゥン山への感謝の言葉の中でこの女性への言及があるのだろうか。コアクチン老婆—ここでは“コアクチン母”と呼ばれているが—は、一体何を聴き、何を見たのであろうか。この内容に該当する行為として考えられるのは、コアクチンが巻2の§ 98で、敵の襲撃を知らせたことである—結論的にはメルキト集団の襲撃をタイチウド集団のそれと誤認したのであったが—。コアクチン老婆は、このときにボルテ夫人を守ろうと努力するが、最終的にはそれも空しくボルテ夫人もろともにメルキトに奪われてしまう(巻3 § 101)。

こうした明示的な流れから見れば、テムジンがコアクチン老婆に感謝することがあるとすれ

ば、ボルテを守ろうとした行為を指すのが当然のように想像されるが、そうではない。テムジンがブルカン山に隠れた段階においてはコアクチンがボルテと行動を共にしていたことは知らなかった可能性もあるからである。それよりも不思議なことは、テムジンが彼女が敵を“誤認”したと判明してもなお彼女の通報に感謝していることである。なぜなら、この“誤認”はボルテ夫人を奪われる契機となったのであるから、テムジンとしてはなぜ誤認したのかコアクチンを非難してもよい事態だったと言えるからである。

言うまでもなく、テムジン一家を襲撃して来た敵がタイチウド集団なのか否かは大きな違いがある。タイチウドであれば、テムジンは自分自身をまず守らなければならないが、メルキトであればそうはしなかったのではないかと推測されるからである。タイチウドについて補足しておく、このボルテ事件よりも前に巻2の§79において、タイチウド集団はテムジンを拉致したことが叙述されているのである。このときにテムジンはソルカン・シラの助けや彼の子供たちの助力で危難を乗り切っている<sup>1</sup>。

拙稿で論じたように（藤井 2014b）、テムジンは実はボルテ夫人を奪われたように見せかけて、実は別の目的をもってこのボルテ夫人事件を“演出”したのではないかと考えられる。別の目的とは、ボルテ事件を演出することによって、ケレイトの王罕やジャムカを事件に巻き込み、最終的にジャムカに奪われたイエスゲイ・バアトルの遺民を奪還しようという目的である。この“演出”説に基づくなら、テムジンによるコアクチンへのこうした感謝がなされていることは当然ということになる。なぜなら、コアクチン老婆が襲撃者を“誤解”した行為はテムジンの戦略において必須のものであったからである。すなわち、この戦略においては、テムジンはメルキトに自分の妻を奪わせることがまず必要だったからである。

ただし、腑に落ちないのは、彼女への感謝が、ブルカン・カルドゥン山に対する感謝を表明する言葉の中に埋め込まれていることである。言うまでもなく、コアクチン老婆の行為は、ブルカン・カルドゥン山でテムジンがメルキト集団から逃避できたことの感謝とは無関係だからである。むしろ、同一箇所、2つの別個の感謝をまとめて述べてはいけないということではないが、あえてこの女性にのみ謝意を表わすことの必然性がないように思われるのである。

## 1. 本論の目的及び秘史の取り扱いに関して

### 1.1. 本論の目的

テムジンのブルカン山への感謝の言葉の中にコアクチン老婆への感謝の念が言及される理由として、本論では、コアクチン老婆をウリヤンハイ集団の“ジャルチウダイ老人の妻”であったのではないかという仮説を提起することにしたい。

この女性の名前であるコアクチン Qo'aqčïn とは、黄褐色を表わす qo'a と女性の名前を表わす -qčïn から構成されている。そして、このコアクチンに“老婆”を表わす emegen がついてコアクチン老婆と訳出しているが、この emegen は、男性の老人を表わす ebügen の対応名で、どちらも通常親しみを込めた呼び名であると理解されている（de Rachewiltz 2003:400）。すなわち、

そもそもジェルメの親世代であったということを考えると、彼らは年齢的に高齢者ではなかった可能性がある。

ところで、ジャルチウダイ老人はブルカン山の鍛冶職人であった。このことは彼が“ふいごを背負って”ジェルメをテムジンのもとに連れてきたという内容の記されている巻2 §97から理解される。そしてコアクチンがジャルチウダイ老人の妻であったのなら、彼女もまたブルカン山の関係者となる。以下においては、この仮説に従うと秘史の多くの叙述箇所をうまく説明できることを示すことにしたい。

## 1. 2. 本論における秘史の取り扱いに関して

以下、本論における秘史の取り扱いに関する基本的事項を、(1) 対象のジャンル規定、(2) 対象文献、(3) 対象の範囲、そして(4) 方法論の4つの観点から簡単に記述しておきたい。

### (1) 対象のジャンル規定

秘史を筆者は当該文化における言語芸術作品である“英雄叙事詩”のひとつとして捉えている。筆者が現在のところ考える“英雄叙事詩”とは、一般的なジャンルとして通用している(と思われる)ものとは若干異なる。すなわち、これは、伝説などのように「伝統的に」英雄叙事詩とは異なるジャンルとして扱われてきたものを含む幅広い概念である。なぜそのような概念で英雄叙事詩を捉えているのかといえ、ひとつには、モンゴル人の伝承者自身がしばしばジャンル規定には無関心だからである。もうひとつには、筆者が取り扱った伝承には英雄叙事詩以外にも伝説や民話や書承で伝えられた文学作品もあるが、そこにおいては、明示的に読み取れる意味とは反対の (opposite)、もしくは対照的な (contrastive)、非明示的な意味をもつ内容が観察される。明示的内容と非明示的内容のこうした構造の共通性のほうがジャンルの境界よりも重要であると思われるからである。明示的に読み取れる内容とは反対の、もしくは対照的な非明示的な内容の存在は、言論の不自由な社会における言論の可能性を切り開く芸術的技巧として注目すべきものといえる。

### (2) 対象文献

筆者の秘史研究においては、原文の音訳漢字をローマ字転写するさいには、四部叢刊本を定本として編まれた栗林均・确精扎布編『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』(2001年)に依拠している。訳語に関しては、小沢重男の『元朝秘史全釈』3巻と『元朝秘史全釈続攷』3巻(1984~1989年)及び岩波文庫の『元朝秘史』上下巻(1997年)を参照した。

### (3) 対象の範囲

四部叢刊本の続集二巻を含めた計十二巻を便宜的に「ひとつの作品」とみなし、この総体を対象とする。秘史の編集過程においては多くの説があるが、現在のところ、敢えて連続体のものであるとして扱うということである。

### (4) 方法論

テキスト読解の方法論は、フランスの構造・記号学者ロラン・バルト (Roland Barthes) が「物語の構造分析序説」で示した構造分析枠組みにもとづいている (ロラン・バルト 1979 [1977]: 1-54)。この方法論は、歴史学における方法論とは異質なものである。歴史学においては言語を現実を生起した事象を反映している—反映の際のイデオロギーの歪みのある程度は認めてもいる—とみるが、筆者の採っている言語観は構造主義的立場に立つものであるため、言語は現実の反映でなく“言語=世界”という見方を採る。言語観のこうした差異は当然ながら秘史の読解に多くの差異を生み出すことになる。本論で扱うテムジンによるブルカン・カルドゥン山への逃避は『聖武親征録』や『元史』には見られず、『集史』には全く別の事情が記されている<sup>2</sup>。いずれ秘史の叙述と『集史』の叙述の関係は深く考察されねばならないが、本論ではこれを議論しない。

### 1.3. 議論の流れ

本論での考察はボルテ夫人がメルキト集団に略奪される“ボルテ夫人事件”について拙稿で論じたことを前提とするため、まず2. においては拙稿の“ボルテ夫人事件”についての非明示的な内容を要約しておくことにしたい。そこにおいては本論の考察に必要な拙稿の補足も行なう。続く3では、秘史におけるコアクチン老婆とジャルチウダイ老人の出現箇所を確認する。その後で、彼ら2人に関連する箇所をコアクチンがジャルチウダイの妻であったと仮定すると非常にうまく読み解けることを示す。最後の4. では結論を述べ、今後の課題にも触れることにしたい。

## 2. 秘史における“ボルテ夫人事件”

### 2.1. 秘史における“ボルテ夫人事件”の非明示的内容

筆者は、「元朝秘史」におけるボルテ夫人事件—繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスとして—というタイトルの本誌第6号の拙稿において、テムジンの正妻ボルテがメルキトに奪われた事件を再検討した。本論はこの拙論をもとに展開しているので、まずはこの拙論の概要を述べておきたい (藤井 2014b)。当該事件の非明示的レベルの内容を理解するための一助として図1で明示的レベルの内容と対比して示したので参考にされたい。

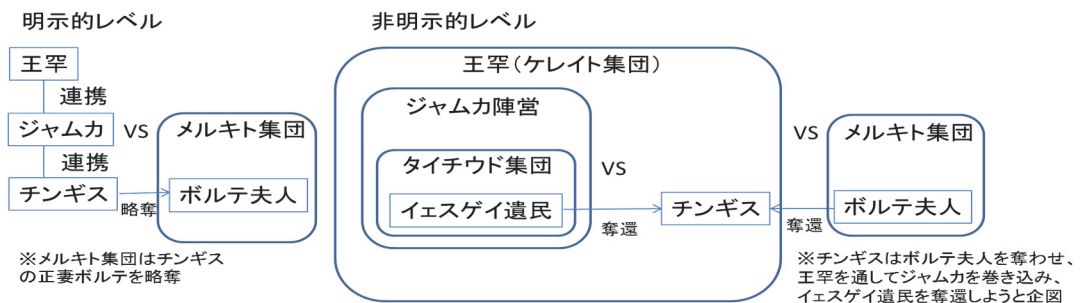


図1 明示的レベル (左) 及び非明示的レベル (右) における人物/集団間関係

“ボルテ夫人事件”は長いので以下においてはボルテ事件とのみ表記することにする。当該事件は独立した事件として取り扱われることが多いが、拙稿ではボルテ事件を“略奪”と“奪還”を1対(1組)として何対か連続している出来事の一つであるという観点から論じた。ボルテ事件を独立した事件ではなくその前後の流れの中で観察すると、その事件がイエスゲイ遺民が略奪された叙述(§72)と、そのイエスゲイ遺民がテムジンに取り戻された叙述(§120)の間に位置しており、さらにこの2つの叙述のあいだにボルテ事件以外に“略奪”と“奪還”が1対となった叙述が複数存在していることが観察される。具体的にいえば、イエスゲイ配下にあった人々がタイチウド集団に従って移動しジャムカ陣営に入った§72から、略奪された民を奪還するという内容―ジャムカ陣営からの人々のテムジン陣営への帰還という意味になる―が述べられる§120までのあいだには、ボルテの“略奪”と“奪還”やイエスゲイ遺民の“略奪”と“奪還”を含め計5つの“略奪”と“奪還”の叙述が織り込まれている(表1のB、C、D、E、F)。

表1：『秘史』巻2§72から巻3§120における6つの“略奪”と“奪還”

	“略奪”と“奪還”の出来事	該当箇所
Aの略奪部分	イエスゲイ遺民の“略奪”(イエスゲイの死後その民がタイチウドと移動) ↓ .....(表1の最下段を参照)	§72
B	ベクテルとベルグテイによる魚の“略奪” ↓(援助者:カサル) テムジンによる未来の魚の“奪還”(ベクテルの殺害)	§76 (§77) §77
C	タイチウドによるテムジンの“略奪”(タイチウドによるテムジン拉致) ↓(援助者:ソルカン・シラとその息子たち) テムジンによるタイチウドからの自身の“奪還”(無事逃亡して帰宅)	§79 (§82~§87) §88
D	テムジン家の8頭の馬の“略奪” ↓(援助者:ポオルチュ) テムジンによる8頭の馬の“奪還”	§90 (§90) §90~§91
E	ジェルメの“略奪”(ジャルチウダイ老人が幼いという理由で連れ帰ったと説明) ↓(援助者:ジェルメの父ジャルチウダイ老人) ジェルメの“奪還”(ジャルチウダイ老人が理由なしにテムジンのもとに連れてくる)	§97  (§97) §97
F	メルキトによるボルテの“略奪” ↓(援助者:王罕とジャムカ) テムジンのメルキトからのボルテの“奪還”	§101 (§104~§109) §110
Aの奪還部分	.....(表1の最上段を参照) ↓(援助者:ボルテ夫人) “略奪”された民の“奪還”(ジャムカ陣営からの人々の移動)	(§118?) §120



考察においては、B、C、D、E、Fの5つがいかに有機的にAと関連しているのかを、まずは援助者を入れない行為項分析—いわゆる登場人物分析—をおこなうことで明らかにした。そのうえで、援助者を考慮に入れた行為項分析をおこなうことによって、ボルテ事件そのものがテムジンによって仕掛けられた事件であったという仮説を提起した。その手順を説明すると次のようになる。

まず、表1のBは、釣った魚の分配をめぐるトラブルにおいてテムジンが同母弟カサルとともに異母兄弟のベクテルを殺害するという一連の出来事を指している。第一の行為項分析によって、これは、将来的に入ってくる財を管理する人間として、ホエルンの息子たちであるテムジンやカサルが“ベルグテイの母”の息子たちであるベクテルやベルグテイよりも妥当であることを決定づけた出来事といえる。つまり、この出来事は、誰がイエスゲイ遺民を引き継ぐかについて問題提起したものである。そして、次のCは、ホエルンのその2人の息子たちのうち、どちらがイエスゲイ遺民を引き継ぐべきかを示した箇所といえる。

タイチウド集団がテムジンを名指しで捕獲しようとしたことを見ると、少なくとも外部からの評価としては、カサルではなく、テムジンを後継者とみなしたことを示している。ただし、この評価はテムジン以外のカサルやベルグテイが納得するものではなかった。この問題に決着をつけたのが、続くDである。なぜなら、Dでは、盗まれた馬群を誰が取り戻すかという事件が生じたさいに、テムジン、カサル、ベルグテイのうち、最終的にテムジンが主導権を執っており、内部的にも、イエスゲイ遺民を引き継ぐ人間として、誰よりもテムジンが妥当だということが示されたといえるからである。続くEでは、ウリヤンハイ集団のジャルチウダイ老人がジェルメをテムジンのもとに連れてきている。この行為は、イエスゲイ遺民をテムジン、カサル、ベルグテイのうちテムジンが引き継ぐことが決定されたので、テムジンのもとに自分の息子を連れて来たということになる<sup>3</sup>。さらに、ボルテ事件の中核であるF（メルキトのボルテ略奪）は重要である。Fは、一見無関係思われるかもしれないが、実際にはA（イエスゲイ遺民の略奪）に関連する内容となっているからである。すなわち、テムジンはボルテが略奪された事件にジャムカを巻き込むことに成功し、イエスゲイ遺民をジャムカから奪い取る契機をつかんだのである。

以上が、イエスゲイの後継者問題に関する考察である。援助者を入れた第二の行為項分析は次のように要約しよう。表1においては↓の右に援助者の名前を入れてあるので参照されたい。援助者について考える場合、BやEは、味方の中に敵がいる（いた）、という点で共通している援助者である（表1の灰色で塗った部分）。すなわち、Bについてのカサルについていえば、カサルはテムジンと後継者争いをしているところを見ると、テムジンとカサルは同じくホエルンの息子でありながら（つまり味方でありながら）、敵—ライバルに近いが—となっているといえる。Eのジャルチウダイ老人についていえば、誰が後継者になるかはともかくとして、明確になるまで息子ジェルメを渡さないでいたことを見ると、味方とはいえない行動をとっていた

といえるのである<sup>4</sup>。すなわち、味方の中に敵がいる、という関係性である。逆に、CとDは、BやEとは反対に、敵の中に味方がある（いた）という点で共通している。Cのソルカン・シラやその息子たちは、ジャムカ陣営に吸収されたと推測されるタイチウド集団に属していたからである。Dのボオルチュについても、Aの奪還部分において、ボオルチュの弟ウグレン・チュエルビがテムジン陣営のもとに合流しにきたという叙述が見えるので、ボオルチュもジャムカ陣営にいたとみてよいからである。

以上のような正反対の援助者のタイプを見ると、F（メルキトのボルテ略奪）における援助者である王罕やジャムカが援助者として異質なことは明らかである。なぜなら、ジャムカは敵であるはずなのに、援助者として登場しているからである―むろん別の拙稿で示したようにジャムカは王罕に促がされて援助することになっただけであるが（藤井 2014a）―。ジャムカだけでなく、Fにおけるジャムカと並ぶ援助者である王罕にしても、援助者とはいえ、他の事例（B、C、D、E）の援助者とは異なる。なぜなら、王罕も自ら志願した援助者ではなく、テムジンに乞われて援助者になった人物だからである。こうした奇妙な援助者を作り出したのはテムジンであるが、テムジンは、味方の中に敵がいたり、敵の中に味方がいたりするというB、C、D、Eを応用したのだと推測される。

重要なことは、王罕とジャムカという2人の援助者を入れないと、テムジンはジャムカ陣営に吸収されていたイエスゲイ遺民を取り戻せなかったといえることである（Aの前半とAの後半）。そうであるならば、「王罕とジャムカに助けてもらう契機」となったボルテ事件は欠かせないものとなる。領民を奪回するためにボルテが奪われる必要があったとするならば、ボルテは奪われたのではなく、敢えて奪わせた事件だという見方が生じてくる。繰り返される“略奪”と“奪還”のエピソードがボルテ事件を頂点として、テムジンの領民の奪還に収斂しているという以上で見たような緊密な構成をみると、ボルテ事件だけが偶発的に起こったとは考えにくい。ただ、自分自身の正妻をあえて敵に略奪させるということはあるのかという疑問も生じる。しかし、これに関していえば、テムジンが換え馬を自分にとっておかなければ、ボルテ夫人は馬に乗って逃げることができ、すなわち、メルキトに襲われずにすんだということを指摘しなければならない（巻2 §99）。

さらに、テムジンが替え馬を連れて行かなければボルテ事件は起こらなかったということ以外にも、ボルテ事件が起こった時期の不自然さを指摘しておかなくてはならない。明示的な叙述によれば、メルキト集団は、昔、テムジンの母ホエルンがテムジンの父イエスゲイに略奪された恨みを晴らすために、テムジンの正妻であるボルテ夫人を奪ったとある。つまり、ボルテ事件は、メルキトの恨みの対象であるイエスゲイに対して行われたのではなく、次の世代のテムジンの世代において“突如として”起こった出来事なのである。

まとめると、次のようになる。テムジンはジャムカ陣営に奪われたイエスゲイ遺民を奪還するために、一連の略奪と奪還のクライマックスとなるボルテ夫人略奪事件を戦略的に作り出したといえる。表1のAの奪還部分における援助者がボルテ夫人となっているのは、彼女が明示



的には被害者であったことを考慮に入れると一見奇妙に思われるかもしれない。しかし、ボルテ夫人は自身が犠牲になることによって、テムジンがイエスゲイ遺民をジャムカから奪還するために「貢献した」と言えるのである。

## 2. 2. “ボルテ夫人事件” 考察の補足

2. 1. では拙稿の概要を要約したが、ボルテ事件において奪われる相手がメルキトでなければならなかったかどうかはこの考察では明らかにできなかったとしていた。しかし、テムジンがボルテ事件を演出したとする論旨に沿えば、やはりメルキトが襲撃するようにテムジンが仕向けていたのは当然であると思わなければならないであろう。おそらくテムジンはメルキトを予め挑発していたと考えるのが妥当である。本論では以下、メルキトの襲撃はテムジンにとっては織り込み済みであったという前提で考察をおこなうことにしたい。

## 3. 秘史におけるコアクチン老婆とジャルチウダイ老人の出現箇所とその考察

### 3. 1. コアクチン老婆及びジャルチウダイ老人の出現箇所

コアクチン老婆の出現形式別の出現箇所を列挙すると表2のようになる。

表2：コアクチン老婆の出現形式別の出現箇所

	出現形式	出現箇所	巻と § 番号
1	Qo'aqčïn	02:47:04	巻2 §101
2	Qo'aqčïn	03:15:08	巻3 §110
3	qo'aqčïn	03:38:01	巻3 §121
4	Qo'aqčïn eke-yi	02:50:03	巻2 §103
5	Q o'a[q]čïn emegen	02:42:06	巻2 §98
6	Qo'a[q]čïn emegen	02:44:10	巻2 §100
7	Qo'aqčïn emegen	02:44:05	巻2 §100
8	Qo'aqčïn emegen	02:45:04	巻2 §100
9	Qo'aqčïn emegen	02:46:02	巻2 §101
10	Qo'aqčïn emegen	02:46:09	巻2 §101

よく見ると、表2の3番目は固有名詞ではないので除外し、出現順に並べ替えると表3となる。なお、各出現箇所と出現箇所の間がどれくらい離れているかも表中に記してある。

表3：出現順に配置したコアクチン老婆の出現する節

	出現形式	出現箇所	巻と § 番号
1	Qo'a[q]čïn emegen	02:42:06	巻2 §98
§98の1節			
2	Qo'aqčïn emegen	02:44:05	巻2 §100
3	Qo'a[q]čïn emegen	02:44:10	
4	Qo'aqčïn emegen	02:45:04	
5	Qo'aqčïn emegen	02:46:02	巻2 §101

6	Qo'aqčïn emegen	02:46:09	
7	Qo'aqčïn	02:47:04	
§ 102 の 1 節			
8	Qo'aqčïn eke-yi	02:50:03	巻 2 § 103
§ 104～§ 109 までの 6 節			
9	Qo'aqčïn	03:15:08	巻 3 § 110

一方、ジャルチウダイ老人の出現形式別の出現箇所を整理すると表 4 のようになる。

表 4 : ジャルチウダイ老人の出現形式別の出現箇所

	出現形式	出現箇所	巻と § 番号
1	Jarči'udai	02 : 41 : 05	巻 2 § 97
2	Jarči'udai ebügen	02 : 42 : 04	巻 2 § 97
3	Jarči'udai ebügen	09 : 05 : 06	巻 9 § 211

出現順位は表 4 の 1 と 2 を逆にしたものとなる。ただし、ジャルチウダイの出現する表 4 の 3 の箇所 (巻 9 § 211) は 1 や 2 の出現箇所である巻 2 § 97 の内容の繰り返しであるため、本論の考察では除外する。コアクチン老婆とジャルチウダイ老人に言及されるのはそれぞれ、表 3 の巻 2 § 98～巻 110 及び表 4 の § 97 であるので、以下における考察は両者を含めた巻 2 の § 97～110 を対象とする。

### 3. 2. 考察

ボルテ事件がテムジンの“演出”であるとすれば、テムジンは自分が逃亡できる場所を確保しておく必要があったはずである。事実、巻 2 の § 79～§ 80 でタイチウド集団に拉致されたさいにはこれに失敗していたことが叙述されている。当該事件においてテムジンはテルグネ丘の密林に逃げ込み 9 泊するが、結局のところ捕縛されてしまったのであった。これを考慮に入れると、テムジンには安全な逃避先の準備が不可避であったはずである。結果的に、テムジンはブルカン山に逃げることによって、メルキトの追っ手を振り切っている。ここには、ブルカン山の鍛冶職人であったジャルチウダイ老人のガイドが不可欠だったのではなからうか。このように推測するのは、ボルテ事件の始まる巻 2 § 98 のすぐ手前の § 97 においてジャルチウダイが“突然のごとく”登場しているからである。§ 97 でジャルチウダイは唐突に自分の息子ジェルメを連れてテムジンに帰属しにきている。2. 1. では彼は単にテムジンがケレイトの王罕の傘下に入ったことを見て安心してテムジンのもとにきたとみていたが (藤井 2014b : 45)、実際には、テムジン或いはテムジン側の誰かが父イエスゲイの遺言をあらかじめ老人に伝えていたことに対する対応であった可能性がある<sup>5</sup>。この観点から読み直すと、この老人がテムジンに言う発話内容をそれまでテムジンに帰属しに來なかつたことに対する“弁解”として理解することができる。具体的にジャルチウダイ老人の言葉は次のようなものである。重要な箇所なので当該節をすべて引用しておく。ただし、ゴシック体はジャルチウダイの発話である。

## ● § 97

02:41:03 tende-če qari=ju Bürği\_ergi-de bü=küi-tür Burqan\_Qa[ ]dun-ača/02:41:04 Uriangqadai gü'ün Jarči'udai\_ebügen kü'ürge-ben ür=ču/02:41:05 Jelme neretü kö'ün-iyen udurit=ču ire=ju Jarči'udai/02:41:06 ügüle-rün ≪Onan-nu Deli'ün\_boldaq-a bü=küi-tür Temüjin-i/02:41:07 törö=küi-tür buluqan nelkei ög=ü=le'e bi. ene kö'ü-ben /02:41:08 Jelme-yi ög=ü=le'e gü bi. üçügen ke'e-n āb=ču od=u=la'a./ 02:41:09 edö'e Je[ ]me-yi eme'el-iyen toqu'ul= . e'üde-en / 02:41:10 negü'ül- . ≫ke'e-jü ö[k]=be.

そこより帰ってブルギの岸にいる時に、ブルカン・カルドウン山から、ウリヤンハイの人ジャルチウダイ老人が、ふいごを背負ってジェルメという名をもつ子をひき連れてきて、ジャルチウダイが言うのに、「オノン河のデリウン・ボルダグにいた時に、テムジンの生まれた時に、クロテンの襦袢を私は与えた。この自分の子を、ジェルメを、私は与えた。「まだ幼い」と言って連れて行った。今、ジェルメに鞍を置かせよ。帳を開かせよ」と言ってジェルメを与えた。

ところで、ジャルチウダイ老人はテムジンのもとに来るまでどうしていたのだろうか。おそらくは巻2の § 73 でイエスゲイの死後にホエルン一家からタイチウドについていった人々の中にいたのであろう。つまり、タイチウドはジャムカ陣営に吸収されていたと考えられるので（藤井 2014a）、この § 97 でジャルチウド老人がジャムカ陣営からテムジン陣営に移ったのであるから、当然、彼の妻であるコアクチン老婆もテムジン陣営に移ったであろう。実際、§ 97 に続く § 98 において、それまで全く言及のなかったコアクチン老婆が“唐突に”登場してホエルンの家で立ち働いているのはこの推測に符合している。§ 98 は次のようになっている。この箇所も重要なので、全文を引用しておく。

## ● § 98

02:42:04 Kelüren\_müren-nü teri'ün-e Bürği\_ergi-de bawu=ju bü=küi-tür / 02:42:05 niken manaqar erde genel şiral üdür geyi=n bü=küi-tür /02:42:06 Hö'elün\_eke-yin ger dотора gödöl=küi Qo'a[q]čin\_emegen/02:42:07 bos=ču ügüle-rün ≪eke eke öter bos= . qajar derbelü/02:42:08 =müi. türbüri'ün sonosta=mu. jalqamşıqtan Tyyiçi'u[t] ayisu=n/ 02:42:09 a=qun ü. eke öter bos= . ≫ke'e=bi.

ケルレン河の源なるブルギの岸に下営している時に、ある朝速く、光がほのかに、日が明けようとしている時、ホエルン母の家の中で働くコアクチン老婆が起きて言うには、「母よ、母よ。早く起きてください。地面が揺れている。蹄の音も聞こえる。恐るべきタイチウドたちがきたようである。母よ、すぐに起きてください。地が揺れている、馬の蹄の音が聞えます。恐るべきタイチウドが近づいているのか、母よ、すぐに起きなさい」と言った。[ただしゴシック体は筆者による。以下、同様。]

実際のところ、§97においては、ジャルチウド老人は「テムジンの生まれたとき、クロテンの襦袢を私は与えた」と叙述されており、ブルカン・カルドウン山には獣が豊富であったので（巻1の§9）、ジャルチウド老人がクロテンを狩ったのであろう。しかし、そのクロテンの皮を剥いてつくった襦袢をテムジンに当てて世話をしたのは妻すなわちコアクチンであったと考えるのが妥当である。それゆえ、コアクチンが夫ジャルチウドと共に再度テムジン陣営にもどったさいにホエルンの家で働き始めるのは自然の成り行きだといえる。それを証明するように、上記のように、コアクチンがホエルンの家で働いているという叙述が現れているのである。

コアクチンがテムジンの赤子時代に世話をしていたこと、そして、コアクチンはテムジンがかつてタイチウド集団に拉致された事件のさいにタイチウド集団にいて実際に見聞きしていた可能性が高いことを考慮に入れると、彼女が結果的に襲撃者たちの正体を見誤りとしてもこの警告を発したのはこの拉致事件のさいの自分自身の無力さを悔いていたせいかもしれない。いざれにしても、コアクチンはテムジンの真の意図は知らなかったことは明らかである。なぜなら彼女は宿営地に取り残されたテムジンの妻ボルテを匿おうと奮闘しているからである。

続く§99は次のようなものである。ボルテ夫人に馬が欠けた事情を説明する重要な箇所であるのでここも全文を引用しておく。ただし、括弧の中の語句は筆者の補足である。

### ● §99

02:43:02 Hö'elün\_eke ügüle-rün «kö'üd-i öter seri'ül=ü-tkün. »kē-et/02:43:03 Hö'elün\_eke öter gü bos=bi. Temüjin+tan kö'üt /02:43:04 öterle=n gü bos=u=at morid-ıyan bari=ju Temüjin niken/ 02:43:05 mori unu=ba. Hö'elün\_eke niken mori unu=ba. Qasar/ 02:43:06 niken mori unu=ba. Qaçi'un niken mori unu=ba. Temüge/Otčigin/02:43:07 niken mori unu=ba. Belgütei niken mori unu=ba. Bo'orču/ 02:43:08 niken mori unu=ba. Jelme niken mori unu=ba. Temülün-ni/ 02:43:09 Hö'elün\_eke ebür-tür-ıyen de'ür=be. niken mori kötöl/ 02:43:10 jasa=ba. Börte\_üjin-e mori duta=ba.

ホエルン母の言うのに、「子供たちをすぐに起こしなさい」と言って、ホエルン母はすぐに起きた。テムジンたち子供らはすぐさま自分の馬を取って、テムジンは一頭の馬に乗った（1頭目）。ホエルン母は一頭の馬に乗った（2頭目）。カサルは一頭の馬に乗った（3頭目）。カチウンは一頭の馬に乗った（4頭目）。テムゲ・オドチギンは一頭の馬に乗った（5頭目）。ベルグデイは一頭の馬に乗った（6頭目）。ボオルチュは一頭の馬に乗った（7頭目）。ジェルメは一頭の馬に乗った（8頭目）。テムルンをホエルン母が自分の鞍の前方に載せた。一頭の馬を従馬に整えた（9頭目）。ボルテ夫人に馬が足りなくなった。

テムジン一家には馬は9頭しかいなかったため<sup>6</sup>、上記のように、ボルテ夫人に馬があてがわれなかったという説明になっている。むろん、従馬をボルテ夫人にあてがうこともできたはず

であるが、これはあえてなされなかった。2. 1. で記したように、ボルテ事件はテムジンによる策略であったので、ボルテ夫人に馬があつては困るのである。とはいえ、この9頭のうちの1頭に新参者のジェルメが乗っているは注意を引く。ジェルメはおそらくブルカン山の密林を案内するために馬に乗っていたのであろうと推測される。

続く § 100 の全文を示すと次のようになる。内容的に後続の § 101 の冒頭の一文も含めて示しておく。

● § 100

02:44:04 Temüjin aqa + nar de'ü + ner morila=ju erte bö=et(e) /02:44:05 Burqan juk qar=ba. Qo'aqçin\_emegen Börte\_üjin-i ni'u=su ke'e=n / 02:44:06 böken qara'utai tergen-tür unu'ul=ju bö'ere alaq/ 02:44:07 hüker kö[ ]=jü Tenggeli[k]\_qoroqan ö'ede gödöl=jü/ 02:44:08 ayisu=n bü=küi-tür herü baru-da üdür geyi=n bü=küi-tür/ 02-44:09 esergün-eçe çerik haran qatara=ju hergi=jü gür=çü /02:44:10 ire=jü «ya'un gü'ün či.» ke'e=n hasaq=ba. Qo'a[q]çin\_emegen/02:45:01 ügüle=rün «bi Temüjin-ü'ei büi. yeke ger-tür qonin kirqa=ra /02:45:02 ire=le'e. ger-tür-iyen qari=ju ayış=i. » ke'e=bi./ 02:45:03 tende-çe ügüle=rün « Temüjin ger-tür büy=yü ü ger keji'e / 02:45:04 büy=yü. » ke'e=bi. Qo'aqçin\_emegen ügüle=rün «ger či/ 02:45:05 oyira büy-yü. Temüjin-i bü=küy-yi ügei ese uqa=bi. qoina-ča/ 02:45:06 bos=u=at ire=bi bi. » ke'e=bi. § 101 : 02:46:02 tede çeri'üt tedüi qatara=ba.

テムジン兄弟たちは馬に乗り、朝早くに、ブルカン山の方へ上がった。コアクチン老婆は「ボルテ夫人を隠そう」と思い、幌のついた黒い木柵のある車に乗せて、腰の斑な牛をつないでテンゲリ川を遡り移動して近づいて来ている時、明け方の薄明かりの頃、日が明けようとしている時に、対面から兵士たちが駆けめぐるて来て、「何者だお前は」と尋ねた。コアクチン老婆が言うには、「私はテムジン家の者です。主屋に羊（の毛）を刈りに来ました。自分の家に帰るところです」と言った。すると（兵士たちが）言うのに、「テムジンは家にいるのか、家はどれくらい遠いのか」と言った。コアクチン老婆が言うのに、「家は近くです。テムジンがいるかどうかはわからなかった。北（の小舎）から起きて来た（から）私は」と言った。§ 101：彼ら兵士たちはこうして駆け去った。

以上のように、コアクチン老婆は最初の時点ではボルテを匿うことに成功している。とはいえ、次の時点でメルキトの兵士たちから逃れられなかったことが次のように記されている。上記に引用した § 101 の部分の次の箇所から最後まで引用しておく。

● § 101 の続きの部分：

02:46:02 Qo'aqçin\_emegen bö'ere/02:46:03 alaq hüker-iyen deled-ü=et öterle=n ne'ü=gü bol=u=n/ 02:46:04 tergen-ü tenggeli ququs ot=ba. tenggeli-ben ququra[q]da=ju/ 02:46:05 yabuqad-iyar hoi-tur



güyyi=jü oro=ya ke'eldü=n bü=küi-tür/ 02:46:06 daruča müt čeri'üt Belgütey-yin eke-yi  
 sundula'uldu=ju/ 02:46:07 qoyar köl in-u čerbegelje'ül=jü qadara=ju gü-r-čü/ 02:46:08 ire=e[t] «ene  
 tergen ditora ya'un te'e=jü a=mu. » ke'e=be./ 02:46:09 Qo'aqčün emegen ügüle=rün «ungqasun  
 te'e=jü a=mu. » ke'e=bi./ 02:46:10 tede čeri'üd-ün aqa+nar in-u ügüle=rün de'ü+ner kö'üd-iyen/  
 02:47:01 «bawu=ju üje=tkün. » ke'e=be. de'ü+ner kö'üt in-u bawu=ju/ 02:47:02 qa'atai tergen-ü  
 qa'alqa ab-küi-lu'a ditora qatuqe[!]/ 02:47:03 gü'ün sa'u=ju ima-yi tergen-eče čir-čü bawül=ju/  
 02:47:04 Qo'aqčün jirin-i sundula'ul=ju ab=u-at Temüjin-ü qoyina/ 02:47:05 -ča ebesün-ü alurqai-bar  
 mö[č]gi=jü Burqan jük/ 02:47:06 qar=ba.

コアクチン老婆は腰の斑な牛を鞭打って、すぐにその場を離れようとする、車の車軸がポキッと折れた。自分の車軸を折られて、「徒歩で森に走って入ろう」と話し合っている時に、また、さきほどの兵士たちがベルグテイの母を馬の後部に乗せて、二本の足をぶらぶらさせて駆けて来て、「この車の中に何を積んでいるのか」と言った。コアクチン老婆が言うのに「羊毛を積んでいます」と言った。兵士たちの年長者たちが言うのに、「弟たち、子たちよ、馬から降りて（調べて）みよ」と言った。その弟たち、子たちは降りて、閉じられた車の戸を取り去ると、中にまさに貴婦人然とした人が座っていて、彼女を車からひきずり下ろして、コアクチン老婆と二人を（馬の）後部に載せて、テムジンの後から草の踏み跡を辿ってブルカン山の方へ上った。

ここで重要なのは、コアクチン老婆がボルテ夫人を乗せた馬車の車軸が折れたとあるが、この様子が「自分の車軸を折られて」と受動態で表現されている点である。秘史における受動態は一見不可思議な箇所において現れるが、非明示的にはやはり受動態になっていることに意味があることを拙稿で指摘したことがある（藤井 2011 : 53）。ここにおいても、まさに非明示的に受動態がふさわしい箇所、おそらく、テムジンはコアクチンがボルテ夫人を連れて逃げる際にこの車を用いることを予期していて、この車軸をわざと折れるような塩梅にしてあったのであろう。そして、この箇所で受動態になっていることからテムジンがコアクチンに計画を伝えていなかったことが示唆されている。つまり、コアクチン老婆は、テムジンの戦略を知る由もなかったので、「自分の車軸を折られた」という被害の表現になるのである。彼女の悲痛な使命感が、この短い受動態によく表われている。

注目すべきことは、この § 101 の末尾で、敵陣の兵士たちがコアクチン老婆とボルテの二人を馬の後部に載せて、テムジンの後から草の踏み跡を辿ってブルカン山のほうに上ったという叙述である。この兵士たちの行為は、馬の足跡を彼女たちが知っているかもしれないということもあったかもしれないが、ブルカン山の山事情はジャルチウダイ老人の妻であるコアクチンがよく知っていると考えたからに違いない。

続く § 102 では、前節の § 101 とは場面が変わり、ここではテムジン側の言動が記されている。ここで、メルキトの兵士たちはブルカン山を三周してもテムジンを捕獲することができな

かったと書かれている。

● § 102

02:48:02 Temüjin-ü qoyina-ča Burqan\_Qaldun-ni qurbanta quči'ul=ju/ 02:48:03 erüs-ü=n yada=ba. eyin teyin bulji=asu ümbü šibar berke/ 02:48:04 hoi in-u čatqulang moqay=ya širqu=asu ülü bol=qu/ 02:48:05 berke šikui qoyina-ča in-u daqa=ju erüs-ü=n yada=ju'ui./ 02:48:06 tede qurban Merkit a=ju'u. Uduyit\_Merkid-ün Toqto'a/ 02:48:07 Uwas\_Merkid-ün Dayir\_usun Qa'at\_Merkid-ün Qa'atai\_Darmala/ 02:48:08 ede qurban Merkit erten-ü Hö'elün\_eke-yi Čiledü-dača/ 02:48:09 buli=ju abta=la'ai ke'e=n edö'e tere ösö[ ]ösö=n ire=[k]se[t]/ 02:48:10 a=ju'u. tede Merkit ügüle[ ]dü=rün «Hö'elün-nü hači abura=n/ 02:49:01 edö'e emes-i an-u ab=u=ba. hači-yan abura=ba bida. »ke'el/ 02:49:02 dü=ju Burqan\_Qaldun-nača bawu=ju geyit=tür-iyen/ 02:49:03 ajira=ba.

テムジンの後から、ブルカン・カルドゥン山を三周させられて捕えることができなかった。(テムジンが) ここかしことと隠れたので—泥濘のひどい、困難な森は、飽食した蛇にはもぐり込もうとしてもできない(ほどの)困難な森である—(テムジンの)後から追いかけて捕えることはできなかった。彼らは三メルキトであった。ウドウイド・メルキトのトクトア、ウワス・メルキトのダイル・ウスン、カアド・メルキトのカアタイ・ダルマラこれら三メルキトは「かつてのホエルン母がチレドから奪い取られた」と言って、今、その仇を取りに来たのであった。彼らメルキトが共に言うのに「ホエルンの仇を取って、今、女たちを取った。仇を取った我々は」と共に言って、ブルカン・カルドゥン山から下りて家々に帰った。

秘史には上記のように、ブルカン山を「泥濘の深い、困難な森は、飽食した蛇にはもぐり込もうとしてもできない(ほどの)困難な森」と表現している。むろん飽食した蛇とは、明らかにメルキト軍を指すのであろうが、見逃してはならないのは、テムジンにとっても、この森の条件は同じであったことである。それでも、一方のメルキトの兵士たちは彼を探し出すことができず、他方のテムジンは逃げ切った。この逃亡には、ブルカン山を熟知するジャルチウダイ老人が関わっていたと考えるのが理にかなう。すなわち、この森の中を自在に移動しつつ隠れることができたのは、ジャルチウダイの手引きのおかげだったと考えるのが妥当だろう。

だとすれば、ジャルチウダイ老人の手助けについての言及が一度もないのはなぜだろうか。実際、メルキトから逃げおおせた後に口にするテムジンのブルカン山への感謝の言葉の中にも、彼の妻であるコアクチンへの感謝はあるもののジャルチウダイの名前には全く触れられていない。この理由を考えると、ジャルチウダイはテムジンに必ずしも賛同していなかった可能性を考えてみる必要がある。なぜなら、テムジンが突然のごとくジェルメを所望してきたことには、ジェルメを“人質”にするという意味があったのだとこの老人が受け取ったとしても不思議はないからである。どの時点かは不明なものの、ジャルチウダイは自分が利用されただけでなく、自分の妻であるコアクチンもテムジンに利用されたことを悟ったのではなかろうか。

そもそも、ジャルチウダイはイエスゲイの死後にタイチウドに従ってジャムカ陣営に入っていたことを考えると、常識的な範囲で政治の動きを読める人物であったと推測される。それゆえ、テムジンの策略―ボルテ夫人を利用してジャムカ陣営に吸収されていたイエスゲイ遺民を奪還するという策略―が見えた段階で、ジャルチウダイのテムジンへの心情は微妙なものになったはずである。ブルカン山に手引きしてもらって命拾いしたにも関わらず、ジャルチウダイ老人への謝意がテムジンに見られないのは、このことと関係していると考えると納得がいく。

実際、このボルテ事件においてメルキトが引き上げたかどうかを確かめる際に、テムジンは、ジェルメを、ベルグテイ、ボオルチとともに探索に行かせている。テムジンがこの探索にジェルメを使ったのも、ジャルチウダイの息子であるのでジェルメもまたブルカン山を熟知していたからであろう。つまり、ジャルチウダイの立場に立てば、彼の一家3人はことごとくテムジンに利用されたということになるのである。

続く § 103 は次のようになっている。全文を引用しておく。

### ● § 103

02:49:09 Temüjin «tede qurban Merkit maqat geyit-tür-iyen ajira-bay ü / 02:49:10 bük-čü'ü a=mui.»  
 ke'e=n Belgütei Bo'orču Jelme qurban-i/ 02:50:01 Merkid-ün qoyina-ča uqa'uta qurban qonoq  
 daqa'ul=ju/ 02:50:02 Merkid-i küngke'ül=jü Temüjin Burqan de'ere-če bawu=ju/ 02:50:03 e[b]če'ü-ben  
 mö'elet=čü ügüle=rün

テムジンは「彼ら三メルキドは確かに自分の家々に帰ったのか隠れているのか」と言って、ベルグテイ、ボオルチュ、ジェルメの三人をメルキドの後ろから探索がてら三泊追跡させ、メルキドを遠ざけて、テムジンはブルカン山から下りて、自分の胸を押さえて言うには、

02:50:03 の続き : «Qo'aqčın\_eke-yi コアクチン母が、  
 solongqa/ 02:50:04 bol=ju sonos-qu-yin tula いたちになつて聴きたるゆえ、  
 ünen bol=ju üje=gü-yin tula/銀鼠になりて見たるゆえ、  
 02:50:05 büdün beye-en buru'ud=u-n 身一つで逃れ  
 bugiya moritu 前脚をしばった馬で  
 buqu-yin horum horumla=ju /鹿の通り路を行き、  
 02:50:06 burqasun ger gerle=n 樹の枝でつくった家を家となし  
 Burqan de'ere qar=u-la'a./ブルカン山上にのぼった。  
 02:50:07 Burqan\_Qaldun-a ブルカン・カルドウン山に  
 bö'esün-ü tedüi amin-iyen bulji'ulda=ba bi./風ほどの己が命を隠してもらったぞ、私は。  
 02:50:08 qačqaqan amin-iyen qayirala=n 唯一の己が命を惜しみ、  
 qačča moritu たつた一頭の馬に乗って  
 qandaqay-yin/02:50:09 horum horumla=ju 野鹿の通り路を行き

qalqasun ger gerle=n 折れた枝の家を家となし、  
Qaldun de'ere/ 02:50:10 qar=u=la'a bi.カルドウン山上にのぼった、私は。  
Qaldun\_Burqan-a カルドウン・ブルカン山に  
qarča-yin tedüi amin-iyān/ こおろぎほどの己が命を  
02:51:01 qalqalaqda=ba je bi. 守られた、私は。  
maši ayu'ulda=ba'ai. 非常に恐れさせられた、私は。  
Burqan\_Qaldun-i/ブルカン・カルドウン山を  
02:51:02 manaqar büri maliya=suqai.朝ごとに祀ろう。  
üdüi büri öči=sügei.日ごとに言祝がん。  
uruq-un uruq/ 02:51:03 min-u uqa=tuqai. ≫我が子孫の子孫まで省察せよ。

02:51:03 の続き : ke'e=n naran esergü büse-ben güjü'ün-dür-iyen/ 02:51:04 erigele=jü maqalai-ban  
qar-tur-iyān se'ejigele-jü qar-iyān/ 02:51:05 e[b]če'ün-dür-iyen mö'ele[t]=cü naran[jük] yisün-te  
sögö[t]-cü sačuli öči'üli ö[k]=be.

と言って、太陽に向かって自分の帯を首にかけ、自分の帽子を手にかけて、手を胸に置き、太陽に九度跪き、献酒し、祝詞を捧げた。

ここでブルカン山に登ったのはテムジン一人であったかのように叙述されているが、「樹の枝でつくった家を家となし」とあるところからみると、家族も同行していたことがうかがわれる。そして、明示的には叙述されていないものの、ジャルチウダイもいたことがうかがわれる。それは上記の引用文のなかで「たった一頭の馬に乗って」という表現が暗示している。上記の巻2 § 99 でみたように、テムジンには換え馬があったはずなのに、もう一頭に言及されていないのは、ジャルチウダイが乗っていたためであろう。

一方のコアクチンについて述べると、テムジンのおしめを換え、テムジンに騙されながらも一彼女が必死に守ろうとしたボルテ夫人をテムジンは敵に奪わせようとしていた一、テムジンはこの女性に感謝して当然であっただろう。この女性が生まれたばかりのテムジンのおしめを換えた可能性が高いことから、この女性はいわばテムジンの母のような存在であったともいえる。それゆえ、§ 103 におけるコアクチンへの言及が“老婆”ではなく“母”となっている点は不思議ではない。コアクチンの呼称を“老婆”ではなく“母”とした点に、テムジンのコアクチンに対する感謝の念が表れている。

以上の考察から、テムジンがメルキト集団によるボルテ夫人の略奪を成功させるためには、ジャルチウダイ老人、コアクチン老婆、そしてジェルメというブルカン山を知悉しているこのウリヤンハイ一家が必須であった。そして、なかでもコアクチン老婆の最初の“誤解”がなければ、このボルテ事件は始まらなかった（2. 1. の表1で一目瞭然である）。コアクチンが、テムジンの壮大な戦略—ボルテ夫人をメルキトに略奪させて、彼女の奪回にケレイトの王罕

やジャムカを巻き込み、最終的にジャムカに吸収されたイエスゲイ遺民を奪還するという戦略の一の立役者であった。おそらく、ジャルチウダイ老人は妻のコアクチンの思いに折れざるを得なかった。実際、彼はそれほどテムジンに従ってはいなかった可能性がある。拙稿で論じたように、彼がテムジンに帰順したのは、テムジンがケレイトの王罕の傘下に入ったことを見届けてからだからである（藤井 2014b : 45）。一方、ジェルメは、母であるコアクチンの思いを継いでテムジンに奉仕していくことになる。

秘史におけるコアクチン老婆について言及されるのは、この後しばらく途切れ、§ 110 でボルテ夫人がメルキトから奪回されたさいにボルテがコアクチン老婆と一緒にであったという叙述が再び現れ、それが最後の箇所となる。それまでの節における秘史の内容を要約しておく次のようになる。

§ 104 : テムジンがカサルとベルグテイと共に王罕のもとに行きボルテ夫人奪回の要請をする。王罕はこれを承諾し、ジャムカもまた動員するように言う。

§ 105 : テムジンたちは王罕のもとから帰る。テムジンはカサルとベルグテイに王罕の言葉をジャムカに伝えさせるべく派遣する。ジャムカはその伝言を聞きボルテ奪回を援助すると言う。

§ 106 : ジャムカはカサルとベルグテイにオノン河の源のボトガン・ボオルチで落ち合うことをテムジンに伝えさせるべく遣わす。

§ 107 : ジャムカの言葉をカサルとベルグテイはテムジンに伝える。テムジンはジャムカの言を王罕に届ける。王罕の兵1万と王罕の弟ジャカ・ガムブの兵1万とテムジンは合流する。

§ 108 : ボトガン・ボオルチでテムジンと王罕とジャカ・ガムブとテムジンは三日前に到着していたジャムカの兵2万が合流する。ジャムカはテムジンたちが約束の日に着しなかったことを叱責する。

§ 109 : テムジン、王罕、ジャムカの兵士たちはボトガン・ボオルチからブウラ・ケエルに到ってメルキト集団のトクトア・ベキの集落を襲撃する。トクトアとウウス・メルキト集団のダイル・ウスの2人はセレンゲ河を下ってバルグジンの地に逃げ延びる。

そして、コアクチン老婆に言及される最後の§ 110 は次のようになる。ここも全文を引用しておく。

### ● § 110

03:15:01 Merkid-ün ulus Selengge huru'u söni-de dürbe-jü/ 03:15:02 yabu=qui-tur bidan-u čeri'üt dürbe-jü yabu=qun/ 03:15:03 Merkid-i söni-de gü daruča-ju dawuli-n tala-n/ 03:15:04 yabu=qui-tur Temüjin dürbe-jü ayisu-qun irgen/ 03:15:05 -tür «Börte. Börte.» ke'e=n ungši-ju yabu=qui-tur učira-ju/ -3:15:06 Borte\_üjin tede dürbe-kün irgen-tür bü-jü'üi./ 03:15:07 Temüjin-ü dawu sonos-ču tani-ju tergen-eče bawu-at/ 03:15:08 güyyi-jü ire-jü Börte\_üjin Qo'aqčın jirin Temüjin-ü/ 03:15:09



jilu'a čilbur söni tani=ju bari=ju'ui. sara'ur bü=le'e./ 03:15:10 üje-esü Börte\_üjin-i tani=ju teberildü=n tusulča=ba. /03:16:01 tende-če Temüjin To'oril\_qan Jamuqa\_anda qoyar-a /03:16:02 mün söni bö=et ügüle=jü ilē=rün «eri-gü kereg-iyen /03:16:03 o[ ]=ba. bi söni bü düli=ye. ende bawu=ya bida. »ke'e=jü /03:16:04 ilē=be. Merkid-ün ulus dūrbe=jü ayisu=kuy-yi söni-de/ 03:16:05 sandur=ču ayisu=kui ja'ura mün tende bawu=ju qono=bai./ 03:16:06 Börte\_üjin-i teyin jolqaldu=ju Merkit\_irgen-eče/ 03:16:07 abura=qsan yosun eyimü./

メルキドの民人はセレンゲ河を下り、夜陰に乗じて逃げていく時、我々の兵士たちは逃走していくメルキドを夜でも続けて掠奪していく時、テムジンが逃走して来る人々に、「ボルテ、ボルテ」と呼んで行くと出遭った。ボルテ夫人は彼ら逃走する人々の中にいた。ボルテ夫人はテムジンの声を聞きそれとわかって車から降りて走り寄って、**ボルテ夫人、コアクチンの二人はテムジンの手綱、端綱を夜目にそれと知って握った。**月明かりだった。見れば、ボルテ夫人であることを知って抱き合った。それより、テムジンはトオリル・カン（王罕のこと－筆者注）、ジャムカ盟友の二人にその夜のうちに言って遣わすのに、「求めるべきものを得た、私は。夜を徹することはない。ここに宿営しよう、我々は」と言って遣わした。メルキドの民人は逃走して来るのを夜中に慌てふためき来る間に、その場所に宿営した。ボルテ夫人にこのように邂逅してメルキドの人々から救った模様はこのようである。

以上のように、コアクチン老婆はボルテが取り戻される段階でも共に行動してボルテを守っていたことになる。すなわち、ボルテが奪われる最初から取り戻される最後の最後までコアクチン老婆はこの事件に巻き込まれていたことが理解される。彼女の功績はそれゆえ大きなものであるといえる。

以上により、コアクチン老婆をジャルチウダイ老人の妻とする仮説に基づくと、秘史の内容をより緊密に読み解けることを示した。

#### 4. 結論と今後の課題

##### 4. 1. 結論

本論においては秘史におけるブルカン・カルドゥン山へのテムジンによる感謝の言葉の冒頭にコアクチン老婆の名前に触れられることについての奇妙さを指摘し、この謎を解くためにはコアクチン老婆がウリヤンハイのジャルチウド老人の妻であったとすれば関連箇所を読み解けるという仮説を提起した。この仮説の妥当性を示すために、1. においてはこれまでの筆者の秘史研究の枠組みを改めて確認した。続く2. においては本論の考察の土台となるボルテ事件についての拙稿の概要を示した。その上で、3. においてはコアクチンがジャルチウダイの妻であったという仮説に沿って、彼らの出現する巻2の§97から§103までの内容を読んでみたところ、テムジンのブルカン山への逃避の叙述の細部が良く見えてきた。最終的に、コアクチンは、テムジンがボルテ事件をつくりだす上で、大きな役割を果たした“立役者”であったこ

とが理解された。コアクチンだけでなく、夫のジャルチウダイ、そして彼らの息子であるジェルメという彼女の一家全員がテムジンによって徹底的に利用されていたのであった。

ただし、三人のテムジンとの関係はそれぞれ異なるものと言える。ジェルメについては巻4 §145 等でブルカン山への逃走のさいに命を救ったことへの謝意が述べられているものの、ジャルチウダイ老人には秘史のどの箇所においても感謝の念が表明されていない。ジャルチウダイはイエスゲイ亡き後にジャムカ陣営に入っていたと推測されるので、テムジンにとっては最後まで“裏切者”であった可能性がある。一方のコアクチンについてはテムジンに終始忠実であったため、テムジンのコアクチン老婆に対する謝意は強かったと思われる。秘史においては夫婦を運命共同体と見る見方がないことは、たとえば、明示的にもケレイトの王罕の息子セングムに最後まで寄り添うココチュ馬司とその妻のうち妻だけがセングムに忠実であったことが描かれている巻7 §188 からも明らかである。それゆえ、ブルカン山への感謝の言葉の中で、ジャルチウダイへの言及がなくコアクチンに言及されるのは不思議なことではないと結論づけよう。

#### 4. 2. 今後の課題

今後の課題としては、コアクチン老婆がメルキト襲撃のさいに大きな役割を果たしたとして、それがブルカン山信仰とどのような関連をもっているのかということを検討することであろう。ブルカン山はコアクチン老婆への“恩賞”として与えられたのか、そうではないのか。これが次に検討すべき問題といえる。その際には、ブルカン山はもともとは“ウリヤンハイのシンチ・バヤン”の開山によるものであると巻1 §9にあるので、“恩賞”というよりも“原状復帰”という可能性も視野に入れる必要がある。このあたりの事情については稿を改めて論じることしたい。

〔謝辞〕本研究はJSPS 科研費 16H03491 の助成を受けたものであることを記しておく。

#### 引用文献

〔日本語及びモンゴル語テキスト〕

小沢重男（1984）『元朝秘史全釈（上）』風間書房

小沢重男（1997）『元朝秘史』岩波文庫 上下巻

村上正二〔訳注〕（1970）『モンゴル秘史1 チンギス・カン物語』東洋文庫、平凡社

栗林均・碓精扎布（編）（2001）『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第4号

藤井麻湖（2001）『伝承の喪失と構造分析の行方』日本エディタースクール出版部

藤井麻湖（2003）『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社

藤井真湖 (2011) 『『元朝秘史』の地の文における “我々” 表現に隠された意図—巻3第110節～巻11第263節における一人称複数形についての考察—』『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』7号、pp.45–66.

藤井真湖 (2013a) 『『元朝秘史』の “モンゴル英湯叙事詩” 的研究—現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ—』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第15号、pp.43–70.

藤井真湖 (2013b) 『『元朝秘史』におけるソルカン・シラとジェベ—gelbüre kö'ün= 『語り手』の仮説をもとに—』『愛知淑徳大学—現代社会研究科研究報告』第9号、pp.17–34.

藤井真湖 (2014a) 『『元朝秘史』における anda 概念—王罕—ジャムカ—チンギスの非明示的な三者関係を基に—』『愛知淑徳大学—現代社会研究科研究報告』第10号、pp.47–71.

藤井真湖 (2014b) 『『元朝秘史』におけるボルテ夫人事件—繰り返し現れる “略奪” と “奪還” の諸事件のクライマックスとして—』『愛知淑徳大学大学院論文集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科』第6号、pp.39–54.

ロラン・バルト (花輪光訳) (1979) 「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』みすず書房、pp1-54. [Introduction à l'analyse structurale des récits, R.Barthes, W.Kayser, W.C.Booth, Ph.Hamon: *Poétique du récit*, Seuil, coll. «Points» Paris, 1977 所収]

[英語]

de Rachewiltz (2004) *The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century*: Translated with a Historical and Philological Commentary by Igor de Rachewiltz, Volume One, BRILL LEIDEN/BOSTON

Ratchnevsky, P. (1991) *Genghis Khan: His Life and Legacy*, Blackwell Publishing (Original German text: 1983)

[中国語]

拉施特『史集』第一卷第二分冊 [波斯] 拉施特 主編、商务印书馆出版 (1997)

## 注

- 1 ソルカン・シラについては拙稿 (藤井 2013b) を参照されたい。
- 2 『集史』にはボルテ夫人及びこの事件の顛末について次のような記載がなされている。チンギス・カンの后妃には約 500 人いるが彼女らは各部落から獲得したものである。そのうち何人かの后妃はしきたりに沿って婚礼を行なって娶った者もいるが大部分は征服した国や部落から略奪してきた者である。ただし長后と獲得してきて十分な尊敬を受けているのは次の 5 人である。大皇のボルテ・ウジンはホンギラト部のデイ・ノヨンの娘で、彼女は (チンギス・カンの) 所有する中でも長い期間いて最も尊敬を受けており、権勢も最高級の 4 人の息子と 5 人の娘の母である。(彼女の) 長子はジョチであり、キブチャク草

原を所有する君主と宗王はすべて彼の末裔である。人々が言うには、チンギス・カンとメルキトが戦をした時、メルキトが勝利した。その時、ボルテ夫人のお腹には既にジョチがいた。メルキトは彼女を捕虜とした。その当時、メルキトと王汗の関係が良好であったので、彼らは彼女を王汗のもとに送り届けてやった。王汗は大いに敬意をもって彼女を処遇した。彼とチンギス・カンの父とが古くからの知己であったので、彼女を息子の嫁と見なして待遇していた。チンギス・カンをつが子と呼んでいた。彼のアミールたちは彼に「なぜ彼女を娶らないのか？」という、彼は「彼女は私の嫁である。もし私が邪念をもって彼女を見たら、下劣で不誠実だよ」と答えた。チンギス・カンはこのような状況を知った後、すぐにジャライル部のサルタク・ノヤンの祖父サバを王汗のもとに遣わして妻を連れ戻した。王汗は彼女を当然の尊敬をもって彼に引き渡した。彼女が帰る路上でジョチが生まれた。路上で大変危険だったので停まることもできず、産着を準備することもできず、サバは小麦粉を団子状にこねてそれを被せて胸の前に抱きしめて無事に連れ帰ってきた。その赤子は突然に地上に生れ落ちたので彼はジョチと名づけられた（拉施特 1997:85-86）。Rachnevsky はしかしこの『集史』の内容は信じがたいものであり、秘史のほうが一貫したものとなっていると指摘している（Rachnevsky 1991:35）。

3 ただし、このあたりのジャルチウダイの行為の意味については本論ではやや修正されることになる。

4 ジャルチウダイについてはこうした観点から本論で整理しなおされることになる。

5 襲撃の相手がメルキトであることが予め仕組まれていたのも同じような論法で、テムジン本人ではなくともテムジン側の誰かにメルキトに挑発させていた可能性が高い。

6 巻2 § 89 でテムジン一家から8頭の馬が盗まれる事件が叙述されているが、その際に盗賊たちを追跡する馬が一頭しかなかったという明示的な内容からテムジン一家には合計で9頭の馬しかいなかったということになる。ただし Ligeti は秘史の作者は § 95 でボオルチュがテムジン陣営に参加したときに乗っていた背中の曲がった栗毛馬のことを敢えて“9”という象徴的価値のためにカウントしなかったのだと指摘している（de Rachewiltz 2004:401）。